

## 進化する文学

### ——文学という生命・序——

桑原 文和

一

文学というジャンルに属していると見なされている、言い方をかえると文学ジャンルの中に囲いこまれていた様々な表現について、それを生物・有機体、つまりは生命を持ったものとしてとらえ、語ることができるということには、何の根拠もない。しかし、これは現在もお強い力を持っている文学にまつわる思いこみのうちの一つである。

例えば、文学作品<sup>(1)</sup>の完結性という考え方はこのイデオロギーによって支えられている。一つ一つの小説や詩や戯曲や評論などは、それ自体として完結しており、一部を切り離すことはできないし、逆に余計な言葉を継ぎ足すこともできない。たとえ、作者その人によって削除や加筆が行われたとしても、それは作品に新たな精気を吹きこむようなものでこそあれ、元々持っていた活力を損なうようなものではあってはならない。このような見方・語られ方がなされる時には、既に完結している

その文学作品が持つ生命、つまり一部分を切り離したり、新たなものを不自然に継ぎ足したら失われてしまうようなものが前提になっている。文学作品を一つの宇宙などにたとえて語ることも、宇宙Ⅱ小宇宙Ⅱ身体というイメージの連関からすれば同じ発想に基づいていることになる。

また、生命や生命に関係する言葉を用いていなくても、イメージとして生物を利用して文学を語るということもある。ある小説や詩や戯曲や評論などについて、またそれらの全体についての原則論を語る時など、全体と部分という言葉（それらには二項対立として、時には明確に分けることのできないものとして語られる）を用いるのはよく行われていることである。全体を無視して部分だけを取り出して扱うことは避けるべきであるし、また全体をとらえることばかりを目指して、部分の美（美は細部に宿る？）を見逃してもならない。全体が各部分によってどのように構成されているか、各部分が全体の中でどのような役割を果たしているか、その有機的な関係を読みとらなくてはならない、という訳である。全体の主旨や結論を求めるときを急ぎすぎた読み方や、部分にこだわらずに読み方は、有機的な読みとは言えないということなのだ。ここでいう「有機的」という比喻は、もちろん炭素化合物としての有機物質ではなく、生命を持ったものとしての有機体のことを指している。

このような完結性および部分と全体という見方・語り方は、解剖学と生態学という生物を扱う学問とも結びついている。つまり、文学作品を部分に切り分けて読むのは解剖学に相当し、文学の全体をとらえようとする志向は生態学にあたる。これら二つの見方（学問）はお互いに補い合って、文学作品という生き物をとらえることになる。ただ、どちらかといえば小説や詩などをその構成要素に分けるような読み方は、（少なくとも日本では）受け入れられにくいようだ。これは、いくら死体を解剖しても生きた文学は理解できないという考え方によるのだろう。

しかし、本論で問題にするのはこれらとはまた別の、生物に関するイメージである。生物とは、発生し、成長し、老衰し、死ぬものである。文学に関して、また広く文化の諸ジャンルを語る際に、この生物のライフ・サイクルに関するイメージが利用されている。

例えば、わかりやすいところでは、ジャンルの消長そのものについて、それが生まれ、発達し、衰退していく過程を語る時がそうである。また、ある表現者が若年から壮年・晩年へと年を経ながら創作を続けていく過程を、より良い優れた方向への変化、すなわち成長とか円熟と見なすこともそうである。また、文学の起源を問う思考もまた、文学を生物のように発生するものとして扱っている。

さらに、この生まれ、成長し、死んでいくものとしての生物のイメージは、生存競争による自然淘汰、勝つ／負ける／適する／適さないというとらえ方とも結びつく。先程述べたジャンルの消長について語る物語も、あるジャンルの衰退と共に、それに取って代わり隆盛へと向う新たなジャンルの発生・成長と共に語られることが多いのである。つまり、ある時代に適応した文学ジャンルはその時代に隆盛を見るが、時代状況が変るとそれに適応できずに衰退していく。近代において語られ続けている文学およびそれに属する小説・詩などの下位ジャンルの危機とかいうことも、結局のところそれらが現代に適応できず、より新しい、より現代に適応したジャンルによって淘汰されるのではないか、という発想に基づいている。

このような文学に関する思考・記述の中で、最も進歩・発達という概念と結びつき易いのは、今のジャンルの消長ということも含めた文学の歴史・文学史の記述である。これに対して、普通の批評、例えば文芸時評のようなものは、文学史とは離れて現在を対象にしているように見える。しかし、現在あるものを批評しているものでも、常に過去のものを参照し、また未来のあるべき文学の姿を想定して、現在あるものを批評することになる。つまり、文学の進歩・発達を前提にして、その最終的にいたるべきであると見なされるあり方を批評の基準にしていることが多いのである。つまり、特定の文学史の記述を全く無

視して現在を語るということは、実際にはほとんど行われていない。

以上のような発想および発想に基づいた記述の元になっているのは、明治初期から導入された進化論であり、また生物学の仮説・理論という域を越えて、それを様々な文化的な事象にまで融通無碍に広げることでも成り立っていた当時の文化論、特にどのような点について語ったものである。明治の初めから現在にいたるまで、その時点で読むことの出来る様々な表現の一部を文学という名前で囲いこみ、時間の推移の中に配置し、その間に一定の方向性、流れを見出すことが行われてきた<sup>(2)</sup>。これは、残された化石を通してかつて存在していたと推測できるものや現在存在している様々なものを生物という名前で囲いこみ、進化という流れの中に配置することを真似た行為である。

本論では、文学に関する思考・記述、特に文学史の記述に顕著な、文学は直線的に、一定の方向へ向けて進歩・発達してきたしこれからもするはずである、というとらえ方を批判することを目指している。そのために、「成長」とか「進化」という言葉・イメージ、およびそれに関係する言葉・イメージが持ってきた、または現在も持っている機能について取り上げていく。本来生物の種の分化を説明する説である進化論が文学を語る時にどれほど融通無碍に利用されているかを考察するという

ことになる。

直線的に一定の方向へ向けて、という言い方をしたが、これまでの文学の歴史を（ここでは日本の文学に話を限る）、何の紆余曲折もない一本の線として記述できるように語っているようなものはない。しかし、文学が最終的に到達すべき状態、文学の向ってきた、またはこれから向う目的を前提にし、そういう理想の文学に照らしてこれまでに書かれた詩や評論や小説や戯曲などを批評するという態度は現在も続いている。

ただ、現在においてはそのような文学観は自明のことになっていて、逆に取り出しにくい面がある。そこで、文学および文学を含む人為的な生産物（通常文化と呼ばれるもの）が、一つの方向へ向って進んでいくものである、もし進んでいないとすればそれは誤った文学の変化である、という前提が成立したと思われる時期を検討の対象にする。具体的には日本の近代の文学の端緒をなす明治十年代から二十年代の初頭ということになる。

## 二

「進歩」や「発展」は明治の十年代から二十年代にかけての様々な分野におけるスローガンであり、おそらく多くの分野・場面では（現在も含めて）その後も、スローガンであり続けている

る。例えば、いわゆる進歩史観に基づく「進歩」についての見直しが行なわれているようでも、実際には今までの誤った「進歩」を否定し、新たに正しい「進歩」が求められている、というのが実状である。正しい「進歩」のあり方を見出すというのとそれ自体が、「進歩である」と考えられているようだ。

もちろん、明治初期から続く進歩についての要求ということに関しては文学も例外ではない。例えば、西村茂樹「日本の文学」<sup>(3)</sup>（明治二十一年、一八八八）においては、「諸学術共に著るしき進歩を為し今日は最早進むことありて退くことなきの勢となれるは誠に邦家の為に賀すべきことなり」と語った後で、今後「進歩」させるために何らかの努力を必要とするものの一つとして、「文学」をあげている。「日本の文学」において「文学」の「進歩」が困難と考えられているのは、「他国の学術を其儘に採用す」ることのできない「我国の風俗習慣又は旧来の学術を折中せざるべからざる者」だからである。しかし、その困難を乗り越えて「文学」はやはり「進歩」しなくてはならないという要求がここでは語られている。

これが芳賀矢一「国文学読本緒論」<sup>(4)</sup>（明治二十三年、一八九〇）になると「今後の文学の進歩は蓋し意想の外にあるべし」という、樂觀的な物言いになっている。これは、文学の外側からの発言と内側からの発言との違い——文学に係するものは文学が明治の新しい時代においてどれほど必要かを主張し

なくてはならなかった——なのだろうが、どちらにせよ文学を進歩するものと見なしている点では違いはない。

それでは、ここで期待されている文学における進歩とはどういうことを指しているのだろうか。どのように「文学」が変化した時に、それは「進歩」として認識されることになるのだろうか。

例えば技術的な分野の場合、進歩とは人間の処理する対象の数量の増加であると考えられる。より多くのものを生産し、より多くのものを運び、より多くのものを消費する。ここでいう生産され、運ばれ、消費されるもの、つまり「人間の処理する対象」は具体的なものであってもいいし、形を持たない情報のようなものでもいい。速度の増加、いわゆるスピード化と呼ばれるものも、単位時間内に移動できる距離や運搬できるものの量の増加と考えると同じように数量の増加としてとらえられる。

自然科学や科学技術が担った進歩といわれるのは以上のようなものだが、それでそのまま文学における「進歩」を説明することができのだろうか。

「国文学読本緒論」の他の個所では、印刷の速度が上がったこと、西洋の文学を知る者の数が増えたことに基づいて、文学の「進歩」を期待している。これは「進歩」を数量の増加から説明しているが、「進歩」の原因の説明ではあっても「進歩」そ

のものを説明するものではない。また「西洋の文学」ということとで言えば、「日本の文学」でも「日本の国人西洋の文明を慕ひ諸種の学術を西洋より輸入し」というように「西洋」の文明を取り入れ、参照することで「進歩」するという見方が取られている。しかし、異なった文明を受容することで「日本」の「文学」がどう変るかには触れていない<sup>(5)</sup>。

結局のところ、これらは具体的に「文学」の「進歩」の実際について語っていない。すべてが量的な変化として説明できるようなものとは、考えにくかっただろうし、西洋の技術を直接取りこんでしまえばそれで済むものとも考えられず<sup>(6)</sup>、およそ具体的なイメージを抱きにくかった訳である。

### 三

文学の「進歩」を具体的に説明することの困難さに抗って、文学に関係する人々は文学を価値づけ、社会における位置を得るために、文学の「進歩」を主張し、保証しなくてはならなかった。この明治十年代から二十年代にかけての時期は、様々な分野・ジャンルが自らを近代の日本の社会の中に位置づけ、価値づけることを目指した時期である。研究・学問分野に限っても、大学内の新たな学部・学科の創設、学会組織の結成、学会の機関誌の創刊などがこの時期に集中している<sup>(7)</sup>。特に、西

村茂樹のような文学の「進歩」の困難を危惧するものがある以上、文学を専門とする、または専門分野としての文学を確立しようとする人々は、何としても文学の「進歩」を保証する必要があった。そして、文学の「進歩」について語らねばならない状況の中で取りこまれたのが進化という考え方なのである。

もともと、文学に直接言及した記述の中では、文学が進化するという言い方をしていいるものはほとんどない。その稀な例が前節で言及した「国文学読本緒論」であり、「進化発達の理は生物の免れざる所にして、吾人々類に於ては尤も著しとす。知らずや、吾人が称して文明と呼び、開化といふ所のものも、亦殆ど此進化発達をいふに過ぎざる事を」というように、文学を含めた人間の営為すべて（「文明」「開化」）を「進化」としてとらえている。もともと、「進化発達」という大まかな言い方からすると、ここでの「進化」は進歩と余り区別されずに用いられているということがわかる。

しかし、様々なこの時期の進化をめぐる記述の中では、「国文学読本緒論」のように、生物以外のもの、特に人間の生産物である文化的な事象を進化するものとして語っているものが多し。そして、その語り方のパターンが文学の「進歩」を語る際に流用されていき、さらには現在も流用されている。

人民は国家の為に存する者なりといふ原理に依りて、

一己一己の人には毫も藉す所無き社会あり、或は又国家は人民の爲めに存する者なりといふ理論行はれて、何事に就きても一己一己の人の利益をのみ先とする社会あり、或は又同一社会にして数百年を出てさる中に此関係の上に著き変動を現はす者あり。是れ豈に偶然ならむや、必ず一々其原因ある事なるべし、而して其原因は社会發生して全盛にいたるまでの進化の次第に関する所少からずと思はるれば、試に之を左に論究せむとす

有賀長雄「社会と一個人との関係の進化」<sup>(8)</sup>

(明治十六年、一八八三)

ダルウキン氏ノ所論ハ、止ニ動植物ノ当初簡單ナル原形質ノ一塊ヨリ起リ、漸次ニ進化シテ今日ノ如キ繁雜ナル常態ヲ呈シ、猶且今ヨリ以後モ風土氣候ノ異動種類ノ強弱等ニ由リテ変遷止マラザルノ理ヲ瞭示スルノミナラズ、人類ノ増減、邦国ノ興廢、文字技芸ノ上進衰頽ニ至ルマデ尽ク之ニ関セザルナキノ邃理ヲ闡明シ、而シテ其原旨至大至正間然スル所ナキヲ以テ、今ヤ実ニ其学士社会ニ未曾有ノ尊崇ヲ受クルコト固ヨリ異シムニ足ラザルナリ。

矢田部良吉「動物進化論緒言」<sup>(9)</sup>

(明治十六年、一八八三)

今ヤ旧日本ハ已ニ溶化シテ新日本正ニ進化ス旧日本ノ分子ハ已ニ滅絶セントシテ新日本ノ分子日ニ旺盛ナリ此ノ新旧交迭ノ時ニ当テハ人皆ナ其ノ方向ニ惑ヒ何ヲ取り何ヲ捨ツヘキカ之ヲ決スルニ苦ム然レトモ此ノ如ク煩雜セル世象モ自ラ一定ノ法則ニ従フ者ニシテ若シ其ノ法則ヲダニ知ルコトヲ得ハ世態人事自ラ分明ナルヘク向後社会ノ変遷推移モ亦タ自ラ知ラルヘシ其ノ法則トハ則チ万有進化、自然淘汰ノ原理是ナリ

(略)

「ダーウイン」氏「スペンサー」氏「ハツクスレー」氏「ヘツケル」氏「リュツボク」氏等ノ大家ハ皆ナ進化学ノ泰斗ナリ本邦人「スペンサー」氏等ノ著書ヲ読ム者日ニ増加スルカ故ニ若シ先ツ本書ヲ以テ其ノ捷徑トナサハ或ハ小補アラン歟  
進化ノ勢此ノ如クナレハ法律、宗教、道德モ亦タ其ノ勢ニ支配サレサルヲ得ス(略)  
道德モ亦タ進化ス(略)  
学問モ亦タ進化ス(略)  
言語モ亦タ進化ス

仁田桂次郎「進化管見序」<sup>(10)</sup>

(明治二十年、一八八七)

世の中の事と云ふものは総て進化して行く道理がありませんから、万物実体世界も亦精神に關はる無形の世界も段々進化して行くものであります、此進化と云ふことは近頃西洋で發明したるものであつて、其道理を段々穿鑿すれば一体動物植物の進化と云ふものは、何の以前であるか、何れだけの年数であるかと云ふことは、千万年か億万年か分りませんが、其初めは極く簡單なる有機物が大本であります、其簡單なる有機物は無機物から出来た者であります、其簡單なるものが千万年かゝつたか、億万年かゝつたか、多くの年数を経て其れが段々進化して来て遂に人間と云ふ完全なる動物が出来て来たのであります(略) 偕有形の進化が斯の如くであれば、精神に關する無形のものも同しく進化して来なければならぬ訳であります、然うして見れば国人の性質と云ふ者も、人間が出来き国が出来た以来、今日までには漸々に進化して来て居るに違ひない

加藤弘之「日本人の性質」

(明治二十一年、一八八八)

偕英国にて、ダーウキン氏が、進化論を唱へ初めました頃には諸方より、非常に攻撃を受けまして、同氏が困難

せられたことは、此書に就て見ましても、誠に明瞭に分りませう。然しながら學問の真理は、無學者輩の攻撃に由て、決して破却滅亡せらるゝ者ではありません。それ故僅數十年の間に、進化論は、益々學問社會に勢力を得て、其理論は、動物、植物などの生物学の範圍に止まらず、心理学にも、倫理学にも、言理学にも、歴史学にも、其他、金石、地質、天文など、何等の學問にも、皆之を適用いたし、凡そ理学、哲学などを論ずる人にして、此説を採らぬ者も、今日殆ど無い程に至りました。

伊沢修二「進化原論緒言」

(明治二十二年、一八八八)

社會進化の順序は、簡より繁に入り單純より複雑に進むは、既往數千年來の事實に徴して吾人の熟知する所なり、太古蒙昧の時代より以て十九世紀今日の社會に至るまで、世運の変遷實に極りなしと雖、要するに此の進化の方向を取らざるものなし(略)

夫れ然り余輩は歴史的研究によりて、社會進化の順序は單簡より繁雜に進むものなることを了知せり、今や進んで余輩の本論なる政治の進化に入らんとす、余輩が所謂政治の進化とは、古來より治者と被治者との關係は如何に変遷し來りし乎、而して其の変遷は如何なる進路を取

りし乎と云ふに在り。

此れ等問題を研究するに就て注意を要することは、政治の進化も他の事物の進化と一様に単純より繁雜に入るの元則に従ふ事是れなり

佐藤文策「政治の進化」<sup>(53)</sup>（明治二十三年、一八九〇）

引用を長く重ねたが、政治や国家を扱った論文・演説と、進化論を紹介した本の序文を例にあげた。いずれも人間の社会そのものが進化するものであり、さらに、その社会の中で生まれるあらゆる人為的な生産物もまた進化するということが語っている。

この明治十年代と二十年代初頭には、当時の欧米・西洋をにぎわしている新たな学問の成果として、進化論が学説そのものだけでなく、それが発表された後にまさおこされた論争も含めて紹介されていた。明治十五年にはダーウインの死去にあたってその生涯を紹介する記事が前年に創刊されたばかりの『東洋学芸雑誌』に掲載されている<sup>(54)</sup>。従来この時期の進化論の日本の文化・思想に関する影響に関しては、加藤弘之によるスペンサーの社会進化論の紹介の方に重点を置いたとらえ方がされてきた。科学史の方でも、進化論の科学・生物学における普及に関しては、丘浅次郎『進化論講話』（明治三十七年、一九〇四、増補版は大正三年、一九一四）の果たした力が大きい、

という評価がなされている<sup>(55)</sup>。もちろん、普及といってもそれは少数の知識人を中心としたことのはずだが、少なくとも生物学上の進化という考え方が専門の科学者以外の人々にも知られるようになったのは二十世紀に入ってからのことになる。

つまり、本論で扱っている明治十年代から二十年代には、進化という考え方はかなり限られた人間だけの持つ知識であった。しかしその一方で、進化という言葉が、あらゆるものに適応できる理論、というよりも真理として、便利に使われていたということがある。

また、予め述べておくが、ここで問題なのは進化論がどれだけ日本で正確に紹介され、導入されたかということではないし、正確に紹介されなければならなかった、ということをおおとしていられるのではない。そもそも、十八世紀の後半に始まる進化論に関する議論自体一つの学説としてまとめることができないう多様性を持ったものだし、そのうちのどれが正しいのか現在も決定されている訳ではない<sup>(56)</sup>。後述するように、ダーウインの「種の起原」が持っている他の進化論者には見られないラディカルな点は、ラディカルであるがゆえに他の論者の記述に取りこまれ、語り直される時に抜け落ちてしまうことになった。そして、ここで検討しているのは進化論がどのように紹介されたかではなく、「進化」という言葉・概念がどのようなイ



メーヅや記述の枠組み<sup>ペダグ</sup>を作り出していたかということなのである。

#### 四

さて、引用したいくつかの記述から読み取ることのできる、この時期の生物以外のものの進化に関する考え方の特徴は次のようなものである。まず、第一に進化にはある一定の方向性があるという考え方が強かったということ、第二にその方向は単純から複雑へと向かうと考えられていたということ、第三に器官としては実体の無い人間の精神も同じく、単純から複雑へとという方向性で進化または発達するものととらえられているということである。

最近の新ダーウイニズムにおけるダーウインの「種の起原」(一八五九年)読解では、進化に方向性があるという考え方そのものは、ダーウイン自身が否定したものであることになっている。ダーウイン進化論の最もラディカルなところは、進化の方向性や目的<sup>エンド</sup>を否定し、環境への適応による種の分化という説明しか行わなかったことにあるという。ただ、そういうダーウイン進化論に対する誤解・曲解はヨーロッパでも見られたことであり、むしろ誤解・曲解しかされなかったというべきであ

る。それからすると、日本における進化論の紹介が進化の方向性を前提としているのは当然である。

例えば、加藤弘之「日本人の性質」には「人間と云ふ完全なる動物」という表現があり、人間を進化における究極の生物、進化の最終形態として語っている。このような見方は、進化論が従来の人間中心の価値観、人間と他の動物の間に明確な境界線を引く考え方にすりよるために用いたものである。すなわち、進化とは人間という最も優れた生物を生み出す過程であり、より下等な生物から人間へとという方向性を持っていることになる。

そしてその方向性について、具体的には単純から複雑へとという指向性が前提とされていた。矢田部良吉「動物進化論緒言」では、動物物が単純な「簡單ナル原形質」から「進化シテ」複雑な「繁雜ナル常態」になったということを語った後で、人類の数の増減、国の興亡、文化・技術なども進化も同じ原理によって司られているということを語っている。この単純から複雑へとという方向性は、加藤弘之「日本人の性質」や佐藤文策「政治の進化」にも同様に見られるものである。ものの変化を単純な方から複雑な方へと考えるのは当り前のようだが、実際には特に根拠があることではない。細胞形成以前の原形質のような物質を初めに置き、それからあらゆる生命が誕生したというイメージは確かにわかりやすいのだが、それを生物以外の他のも

のにそのままあてはめることができるということにはならない。

またダーウインの進化についての考え方を引き合いに出すが、進化というのは環境に適応しさえすればいいのだから、進化して構造が単純になる、器官の一部が単純化する種というのも当然考えられる。つまり、単純から複雑へという方向性は進化の一つのあり方でしかない。

三点目の精神の変化についてであるが、例えば「日本人の性質」では「精神に關する無形の世界」という曖昧な表現が用いられ、精神が生み出す思想や観念といった無形の生産物も「進化」するものの中に取こまれてしまっている。さらに以下の引用のように、生物の身体・器官の形態が進化するのだから、人間の精神や精神的な能力も進化しないわけではないと語るものもあった。

心意ノ現象ヲ論ズル亦進化論ノ刺激ヲ蒙レリ、吾人ハ曰ハントス、学者内省法ニヨリ、其心意ヲ検討シ、分類セシムハ、正ニ心ヲ発成ノ点ヨリ論ゼントスルノ端緒ヲ開キシモノナリト。心意ノ状態一トシテ相互ノ關係ヲ為サザルモノナシ、現在ノモノ過去ヨリ続来スルモノナリ。智能ト云ヒ、情想ト云フ、決シテ箇々独立ニ分離シテ存スル能ハズ、其運行ノ間ニハ一定ノ方則關係ヲ有スルモノナシ。サ

レバ其成来セシ全歴史ハ、一定動カザル順序ヲ有シ、其ノ發達進歩ヲ現ハシタルモノナリ。(略)

魚類、水陸両生類、爬虫類、鳥類、下等ノ哺乳類ト、順序ニ其發成進化スル腦ノ階段ト、高等哺乳類、特ニ人類ノ腦ノ發育スルトキ漸次ニ呈スル状態ト、皆全ク相一致シテ同様ノモノタル發見セリ

澤口生「心ノ發育」(明治二十二年、一八八九)

この引用の末尾では、生物の単純な種から複雑な種へ進化する過程で脳が発達していることが語られ、脳が発達を「智能」「情想」といった精神の発達と結びつける説明がなされている。脳が発達することすなわち精神の発達とは言えないのだが(この時期は、脳と精神の關係を証明するべく様々な解剖学的な計量や調査が行なわれた、つまり人間の精神が数量として扱われるようになった時代の始まりではあるが<sup>(26)</sup>)、ここでは脳と精神の關係を説明するために、いわゆる「反復説」が使われている。魚類・両棲類・爬虫類・鳥類・ほ乳類という方向で生物の脳が進化するということを、人間の脳が胎児から大人へと成長していく過程とのアナロジーで説明している。進化の過程というのはもちろん目では確認できないものであり、化石や現在存在している生物の標本などから組み立てていくしかないものなのだが、それを人間の個体の精神の成長という一応目で

確認できることと重ね合わせることで、まるで明確な根拠があるかのように見せるレトリックが用いられている。

そして、前にふれた芳賀矢一「国文学読本緒論」は、ここから一步進んで、「文明開化」とはすなわち精神の進化のことなのだ（「吾人が称して文明と呼び、開化といふ所のものも、亦殆ど此進化発達をいふに過ぎざる」とまで言い切っている。

## 五

明治の初期における（また、それが可能であると考えられているかどうかは別として、現在でもなお）文学研究の最終的の目的は、文学史の記述であり、個々の表現・表現者・表現ジャンルに関する研究は、文学史の記述に奉仕することを目指して行われている（はずである）。そして、文学史の目的は日本の文学がどのように変化してきたかを記述すると共に、そのような変化を超えて一貫している日本文学の中の変らないもの、本質を明らかにすることである。そのような一貫性、本質というものがあるのか、という議論は棚上げにして、あるという前提で現在も様々な記述が続けられている。ただ、明治初期においては、文学史・文学を研究することの有効性は以下のように主張されていた。

文学は其終極の意味に於ては、一国生活の写影なり。人思想の反照なり。普通の識情を表彰すると同時に、普通の識情を奨進し、社会の動力より生じて亦自ら社会の動力となり、果となり因となりて社会の発達進歩を促すものなり。故に私は以て一箇人の品位を高うすべく、公は以て国家の元気を励ますべし。

芳賀矢一「国文学読本緒論」（既出）

文学は、自、人心の写真にて、文学史は、則、人心の進歩の跡を明にするものなり。されど、文学または文学史は、唯無神の写真たるを以て、満足したらんには、何の役にも立たざるべし。文学益々発達するに従ひて、文学其の物の中に、一種の元気を蓄へ、世の中を左右するに至りてこそ、実に文学また文学史の真面目をあらはしたるものといふべけれ。

三上参次「日本文学史緒論」<sup>(5)</sup>

（明治二十二年、一八八九）

文学は人心の反照なり。故に、文学史を以て、古来、人の智徳の進歩せし蹤跡を探り、時代によりて、人間の思想、感情、想像に高下あるを知り、さて、之に応じて、其時代

の人情、風俗、嗜好の類の如何なりしかを、察すれば、啻に人をして、見聞を広くし、智識を増さしむるのみならず、之に鑑みて、其人の思想、感情、想像を高尚にし、其嗜好を優美にし、また野卑陋俗なる性情を脱し去りて、道德も之によりて明かに、政教もこれによりて進み、従ひて凡ての人間をして、漸く此世に生活すといふ大目的なる、真正の幸福の存在せる方針に向はしむることを得べし。

三上参次・高津敏三郎『日本文学史』<sup>③</sup>

(明治二十三年、一八九〇)

これらによれば、日本の「文学」を研究すると、その中に「写」された日本の「人民思想」・「人心」およびその「進歩」を明らかにできる。そして、そこに見出された「進歩」の方向性に基づいて、「社会」の「凡ての人間」に力を与え、「真正の幸福」をもたらす「方針」を提示することができる、というのである。もちろん、これらの過去を知り未来を変えることが出来るという肯定的な評価は、前に述べたように文学および文学研究を社会に位置づけるための自己宣伝という意味を持っており、今でもこのような主張は繰り返されている。

しかし、これらの文学および文学史に対する評価は、前節まで見てきた「進化」という前提を外してしまつたら成り立たないものである。残されている、または現在ある表現を「文学」

として囲いこみ、また「文学史」として一貫した記述を行うためには、一定の統一性・方向性が前提として必要であり、それを保証していたのが、「進化」に関する思考なのである。もし、この明治初期以来の前提に頼ることができないとしたら、「文学史」はどのような統一性・方向性を新たに発見し発明することができるのか。また、個別の表現者や表現に関する「研究」は、どのような「文学史」に対して奉仕することを旨とすることになるのか。もちろん、「文学史」「文学研究」の自明性・必要性自体が、ここでは無効になつており、今の二つの問い自体が成り立たないということも言えるわけだが。

注

(1)

ここでは、「文学作品」という用語を用いているが、これを「テキスト」という用語で置き換えても、現在の文学に関する思考を批判する上では大きな違いはない。ほとんどの場合「作品」という言葉よりも「テキスト」という言葉の方が目新しい(もっとも、最近では「言説」がそれを取って変わっているが)という理由で用いられているからである。ただし、本文のこの後の個所で述べている完結性や部分・全体に関しては多少の違いがある。すなわち、「作品」というものが完結し、全体としての統一性を持ったものと見なされているのに対して、「テキスト」というとらえ方ではその流動性、様々なものを取りこみ、常に変り続け一定の形に収まらないという点に重点が置かれている。当然、加筆や

削除も異文として積極的にとらえられることになる。ただ、このようなテクスト観にも生物のイメージはつきまとうている。つまり、様々なものを取りこみかつ一定していかないという見方は、生物が新陳代謝し、自らの身体の構成物質を変えていくイメージが元になっている。

ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典』（新曜社、一九九九年）に収録された各論文がこの時代の状況を扱っている。

（2）『東洋学会雑誌』二篇九号（明治二十一年、一八八八）。引用に際して明らかな誤植は訂正した。

（3）芳賀矢一・立花銑三郎編『国文学読本』（富山房、明治二十三年、一八九〇）。「緒論」の中の「第六、維新後の文学」より。

（4）西村茂樹『日本文学論』『文』第一巻第十号付録（明治二十一年、一八八八）では、「支那古文」と「西洋古文」とを「比較」

（5）して「西洋古文ノ力アリ実アリテ、之ヲ言ヒ現ハスニ綿密ナルト自由ナルト、又其章句ノ工約ニシテ充分ノ意味ヲ含マシムルガ如キ、若クハ動詞、形容詞、副詞ナドノ働キヲ自在ナラシムルガ如キ、又ハ代名詞ナドノ彼我ノ事物ノ区別明カナラシムルガ如キ」

（6）点で、「西洋古文」の優位を語っている。また、「日本古文」の欠点として「柔弱無力ニシテ長シキコト」をあげ、「壮烈雄偉ノ力」を持つことが必要だという。これは、日本の文章が進むべき方向を語っているものの、現状認識も処方箋も当時の紋切り型の域を出ていない。

西洋の文明・文化受容に関するこのような見方の中に、近代の文化観や文化や国民の性質の固有性に関するイデオロギーが関係している。この点については拙論「どのように文化の固有性は保証

（7）されていくか——「自然」というイデオロギー——」（『国語国文研究』一〇〇号、一九九五年五月）を参照していただきたい。この時期創刊された学会誌には、『人類学会報告』（明治十九年、一八八六、現在の『人類学雑誌』）、『国家学会雑誌』（二十年、一八八七）、『植物学雑誌』（同年）、『動物学雑誌』（二十一年、一八八八）、『史学会雑誌』（二十二年、一八八九、現在の『史学雑誌』）、『地学雑誌』（同年）など、現在も学会の中心の雑誌として続いているものも多い。

（8）『東洋学会雑誌』十九号（明治十六年、一八八三）。

（9）エドワード・エス・モールズ『動物進化論』（石川千代松筆記及訂正）万巻書楼（明治十六年、一八八三）。

（10）仁田桂次郎『進化管見』発行所不明（明治二十年、一八八七年）は「序」に拠る。

（11）『東洋学会雑誌』二篇八号（明治二十一年、一八八八）。

（12）トーマス・ハックスレー『進化原論』（伊沢修二訳）丸善（明治二十二年、一八八九）。

（13）『文』四巻五号（明治二十三年、一八九〇）。

（14）千頭清臣「ダーウキン氏ノ伝」『東洋学会雑誌』九・十号（明治十五年、一八八二）。

（15）岡部昭彦「走り続けた近代科学の歴史」『20世紀フォトドキュメント』第6巻「科学・学術」（ぎょうせい、一九九二年）など。

（16）本論の進化論に関する記述は以下の本によっている。柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編『講座進化2 進化思想と社会』（東京大学出版会、一九九一年）、ステイブ・J・グールド『個体発生と系統発生 進化の概念史と発生学の最前線』（仁木帝都・渡辺政隆訳、工作舎、一九八七年）、同『ダーウィン以来』（浦本昌

紀・寺田鴻訳、早川文庫、一九九五年、単行本は早川書房、一九八三年）、ピーター・J・ボウラー『ダーウィン革命の神話』（松永俊男訳、朝日新聞社、一九九二年）、同『進歩の發明 ヴィクトリア時代の歴史意識』（岡崎修訳、平凡社、一九九五年）。

(17) 文』二巻四号（明治二十二年、一八八九）。

(18) スティーブン・J・グールド『人間の測りまちがい 差別の科学史』（鈴木善次・森脇靖子訳、河出書房新社、一九八九年）。

(19) 『日本文学』十号（明治二十二年、一八八九）。

(20) 金港堂（明治二十三年、一八九〇）。「総論 第一章 文学史とは何ぞ」より。引用は『明治大正文学史集成』1（日本図書センター、一九八二年）による。

本稿は一九九六年十一月十日に行われた北海道大学国語国文学会秋季大会における口頭発表「成長し進化する文学」を元にして  
いる。

（PDFファイルとして出力したところ、注の冒頭の（『』の  
が消えてしまっています）